昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十九年九月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（第一八五号）

慈光

第十六巻　第九号

目次

「教行信証」大信海釈（三）……近角常観……（1）
非僧非俗のこころ……榊原徳草……（5）
禪と念仏……室住熊三……（9）
人は善人になりたがるものです……柳瀬留治……（13）
生くべきか死すべきか……三瓶徳英……（17）
信の旅行く人々……花田正夫……（20）

『教行信証』大信悔釈（三）

近角常観

本願力にあいぬれば　空しくすぐる人そなき
功徳の宝海みちみちて　煩悩の濁水へだてなし

次に又、

『有念に非ず、無念に非ず。……』

こは仏教の観法上に、種々なる色相の形を観る法や、又観ないやり方など、色々の法がある。即ち聖道門で言う時は有念は三十二相、八十随形好の形ある仏身を観るやり方で又無念はそれ等の形を離れて、無意無想を観ずるのである。ところが我々のは、そんな有形や無形に仏のお姿を見る法ではなく、仏の方より私を知ろし召して、飽くまで見捨て給わぬ広大なるお慈悲の塊りの名号、念仏を頂く一つ故、即ち「有念に非ず、無念に非ず」である。

また、

「尋常に非ず、臨終に非ず。……』

尋常は即ち平常の時であります。即ち平常の時ちやんと決めておかぬと、臨終の時には聞かれぬというお慈悲でも

九

また、

『正観に非ず、邪観に非ず。……』

正観は今の定善の観察である。正しく仏のお姿を、常に目に見る如く観察することである。而してその反対が邪観となるのであります。処が又我々の頂く信心は、そんなこちらより仏のお姿を正観することや、邪観することでない。

親鸞聖人は、天親菩薩の仏の本願力を観たてまつるに、遇うて空しく過ぐる者無し。能く速に功徳の大宝海を満足せしむ。

の文の観の字を、この観は「みそなわす」であるとお読み下された。即ち仏より我々のして見よう無き心中を、哀れと観そなわし下さる一念に、ああ有難い、とその遣る瀬なき大悲のおまことが頂けたのが信心なれば、信心即ち仏の正観なのである。仏より正しくしろし召し下されるのである。我々のこちらよりこしらえる正観や邪観ではないのであります。ここは又『和讃』に、

なければ、又いよいよ臨終と取り詰めると、誰でも必ず頂けるという信心でもない。即ち平常であろうと、臨終であろうと、遣る瀬なき広大の御あわれみに疑い晴れた、たちどころが信心で、それが平常であろうと臨終であろうと、それを問うを要しないのである。

故にこの御慈悲の上からは、臨終に及んで仏の来迎を期し、正念に住しなくてはならぬと、力むこともなければ、又平日の時ああじや、こうじやと、準備して頂く信心でもない。たとい平常であろうと臨終であろうと、乃至病中であろうと、この穢き胸中にお見捨てなき広大のお慈悲一つを頂くことが肝腎なのであります。

一〇

又次ぎには、

『多念に非ず、一念に非ず。……』

この一念、多念の争いが親鸞聖人御在世の時から大変やかましかつたのである。御存知の如く、多念義というは常に南無阿弥陀仏々々々と始終念仏称えなくてはならぬというのである。これでは何時まで経ても安心ということがなく、何時までも称えつめて居なければならぬようになるのである。又一念義というは、聞く一念にハツとお慈悲に気がつくと「もうこれでよい、これで信心が頂けた」となる、これであります。

で多念義の方でいくと、所謂修養の誤りに堕ちて常に南無阿弥陀仏々々々と念仏を口にして、不断に修養して行く意味となり、遂に臨終正念まで、それまでいくのが多念義である。又一念義は、頂く一念に「もう事済になつてしまつた。もう頂いてしまつた」という邪見に陥入る恐れがある。

ところがこの一念多念の問題は、信仰上昔も今も変りなく、常に注意すべき問題なのであります。で多念義の方は、これが人生に現われる上より言う時は、人生の事々物々を「あれもお慈悲のあらわれである、これもお慈悲の催しである」と、万事万端修養風に喜んで行く信仰となり易い。又一念義の方は、所謂今日でいう実験的は実験的なるも、今まで久しく人生の苦悩に泣きた者が、一念広大なお慈悲のお知らせに預るなり、自分の喜びにお慈悲の方は忘れてしまい、「自分はもうこれでよい」となる。甚だしきは、その一念の感激の有る無しで信仰に句切りをつけ、遂にこれから秘事法門なども出て来るようのことになるのである。でこの一念多念の味いは非常に考えるべきことなのであります。

ところが当流の親鸞聖人のお示し下さるところはどうかというに、蓮如上人は『御文』にのたまわく、

「一念をもては往生治定の時刻とさだめて、そのときの

命のぶれば、自然と多念におよぶ道理なり。云々」

今まで人生の憂苦に行き悩んでいた者が、初めて広大な遣る瀬なきお慈悲を知らされた時は「やれ有難や」と、一念の信楽を開発する。その一念開発の時をもてば、即ち「往生治定の時刻と定めて、その時のいのちのぶれば、自然と多念におよぶ道理なり」……即ち初めて有難き親の思召しであると、親のお慈悲の胸に貰えた一念が即ち信楽開発の一念なのである。でその一念がお慈悲の頂けた一念に違わぬが、その一念の上からは、いつ思い出さして貰うても、必ずしもいつも初一念の喜びが常にあるわけではなけれどもいつ何時、自分の胸中を眺めても、遣る瀬なきお救いに一点の疑いがなくなり、ひとたびこの一念に夜明けさせて貰うた上からは、たとい時には貪愛瞋憎の雲霧におおわれ、時には暴風駛雨の荒立つことあるも、その下からいつも、相変りなく南無阿弥陀仏々々々と、腹一杯喜ばせて頂けるが初め一念に頂いた信心なるも、その一念が自然と多念に及んで下さる味いなのであります。

でこの遣る瀬無きお慈悲のことは、これを一念ときめても不可なれば、多念と言うてもいかぬのである。何故なれば、大悲の親様が広大の御まことを以て私を待つて〳〵待ちかねて下され、

至心信楽欲生と　　十方諸有をすすめてぞ

不思議の誓願あらわして　本願選択摂取する。

かく待ちわびて下さる広大の御心を、初めて聞かせて貰うた一念に、

「一向専修の人においては、廻心ということただひとたびあるべし。その廻心とは、日ごろ本願他力真宗を知らざる人、弥陀の智慧をたまわりて、日ごろのこころにては往生かなうべからずとおもいて、もとのこころをひきかえて、本願をたのみまいらするをこそ廻心とはもうしそうらえ。云々」（歎異鈔）

と。この私の根性を飽くまで見捨てず、飽くまで不まことの私に、まことを以て向い、呼びかけて下さる広大のお心を聞かせて貰うた時に、やれ有難やと、その広大のお慈悲が私の心中に届いて下された有様が、

「夫れおもんみれば、信楽を獲得することは、如来選択の願心より発起し、真心を開闡することは、大聖矜哀の善巧より顕彰せり。」（信巻）

とお知らせ下さる信楽開発の極促なのである。然るに是れ程広大の如来廻向のおまことに預りながら、それを頂くに「イヤ一念に預りてしまうのであるの、多念にジリ〳〵頂くのであるの」などというて居られるべき事じやない。大悲のお手許の御苦労の方はと言うに、親様はこれを知らせるために五劫永劫の苦労までして、遣る瀬なき心を運んで下され、大聖釈尊が八千たび娑婆往来して下されたのも、畢竟この私をたすけるとの遣る瀬なき大悲の御苦労に外ならぬのである。で、かく是れ程までの広大なる選択願心の御念力でもつて向うて下さる遣る瀬なきお恵みなれば、かく御同よう一堂に集つて喜ばせて貰うことの出来るのは、或は前世において同じ席にて共に仏縁に遇わせて貰うた間柄であるかも知れぬ。或はまた同じ禍で共に苦しんだのかも知れぬが、とにかく生々世々、過去遠々の昔より、色々のことでさ迷い来つた御同ようである。然るにその者を飽くまで捨てぬとの大悲より、過去遠々の昔より一切の仏菩薩が、その者にありとある縁、手がかりをおつけ下され、とうど今世において、釈迦世尊の仰せのままに、弥陀のお慈悲を聞き得た一念、この一念に遂に遣る瀬なき仏の思召しがまるまる届いて下されて、これが即ち信である。

で、斯く大聖矜哀の善巧のお催しにより、かくその一念に選択本願の広大なる思召しを頂くと、不思議なる哉、南無阿弥陀仏々々々と、所謂深き〳〵地獄ならでは行き場の無い罪悪深重の身なることが分り、而もその身が、深き深き広大の御慈悲により、臨終一念の夕べに大般涅槃を超証させて頂く、これが即ち大信海の味いであります。でここになると、最早云うべき言葉がなく、即ち不可思議不可称不可説の大信海である。有念の無念の、一念の多念のと言つて居られる段では無いのであります。

未完

義なきを義とす

「義なきを義とす」とは聖人晩年の教化に常に口に絶えたることなし。しかも常に大師聖人の仰せなりとのたまう。この頃、信友住田智見師『専念往生伝』に見えたりとて、法然上人の御書を示して曰く、

浄土宗安心起行事〈能谷蓮生入道へ返答〉

義なきを義とす、様なきを様とす、浅きは深きなり、只南無阿弥陀仏と申せば、十悪も五逆も、三宝滅尽の時の者も、一期に一度も善心なき者も、西東わきまえぬ者も決定して往生を遂げ候なり、釈迦、弥陀を証とす

建仁二年正月二日　　源　空

此書、西山上人の筆にて、京都永観堂に伝うという。建仁二年と云えば法然上人七十歳にして親鸞聖人入室の翌年なり。かくの如き日夕、力強き御教化を蒙りたまう。金剛不壊の真信を決定したまいて、たとい法然上人にすかされまいちせて念仏して地獄に堕ちたりともさらに後悔すべからずとのたまい、臨終までも、義なきを義とす、と喜びたまえるお心、まことに御尤もと頂くの外なし。

明治四十年十一月一日『求道』

非僧非俗のこころ

榊原徳草

過日慶事があつて名古屋へ参り、帰途一道会館に花田先生を訪ね、久方振りで一夜法味に浴したことであつた。

その法味のうちで何の話からであつたか思い出せぬが一句が妙に耳に残つた、その一句は「聖人は出家を出家された」の語であつた。この一句が私の胸に従来明滅去来していた「非僧非俗」の一句と妙に一つになつたように、感じられた。それで聖人の非僧非俗の一句について味つてみたいと思うのであります。

非僧非俗の語は、教行信証・化土巻の末に、聖道の教が行・証ともにすたれて真実の姿はなくなつているが、浄土の真宗は証道今盛りである、との御言葉で始まり、それからあの念仏者への大弾圧が起こり、或は死罪に或は流罪に遭われる念仏者達、いまここで御師匠法然上人と共に御流罪に遭われた聖人は『或は僧の儀を改め、姓命を賜うて遠流に処す、予は其の一なり。しかればすでに僧に非ず俗に非ず、この故に、禿の字を以て姓となす。』と仰せになつているところに出てくる御言葉であります。禿という字は破戒の意味と聞いています。禿と云う字は聖人が御本典にも「愚禿親鸞述」と書いておられるし、その他の御著述にも愚禿親鸞となつております。特に私などに感銘深いのは御本典信巻の御文『誠に知んぬ、悲しき哉、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近くことをたのしまず、恥ずべし、傷むべし』の御述懐であります。禿の字を姓とされた非僧非俗の聖人の御姿がくつきりとここに出ております。それは満月を仰ぐ如く阿弥陀仏の御光を仰ぎ、その光に照り映えたお姿であり、そこに愚禿の姿が照り映えております。

非僧非俗とは聖人が承元の法難により御流罪にあわれたときの、まことに非痛極まりない御生活に転落されたときのそうならねばならなかつた事実の上の実語であります。今迄は法然上人の御膝元へ毎日通われて如来の大悲をお悦びであつたのが俄に念仏停止の大法難にあわれて、師は西に聖人は北の辺鄙に御流罪となられ有為転変の最中にその時の現実のままに大悲を仰ぎ、そこから阿弥陀仏の光のうちに宣言告白されたのが「僧に非ず俗に非ず」の御真実であります。「愚禿親鸞」の告命であります。悲痛な事実の中に業運のままに生きる外なき姿を深く御感じになられたことでありましょう。またそこにこそ如来の真実の本願がかかつてあつたことも深く御喜びであつたでありましょう。この痛切極まりない何が湧き出るか全く闇の業繋の人間の真相、人生の真の姿の上に聖人の「僧に非ず俗に非ず」の宣言がなされたのであります。

聖人がもしこの法難に遭われなかつたのならば、非僧非俗の宣言はなかつたかも知れない。しかし、この非僧非俗のお名告りは、ただ現実の流罪にのみ局限して味うべきではないでありましょう。既に聖人御自ら「聖道」の諸教は行・証久しく廃れておることは身を以つて叡山の出家生活に於いて見てこられたことであり、心身共に出家の道が、いかに難いことであるかは、事実によつて見聞しておられたのであり、それが他の姿であるばかりでなくて、そのまま自己の内なる姿そのものであることの自覚が念仏によつていよいよ明証されたとしてみれば、俗より出家して、出家の生活を絶対とすることは大矛盾であられたに違いないのであります。ここに俗より出られた聖人は、事実の法難によつて又俗に還らざるを得ない現実と共に、人間の内なる真実の姿にきけば、出家は俗に還らざるを得なかつたに違いないと拝するのであります。しかしここに俗に還るのは、実は出家を捨てて俗に還るのでなくして、出家というものの中にも或る矛盾を感じておられたのでありましょう。

聖人においては、真の念仏者の生き方とは、内外共に出家を、も一度、出家することにあつたに相違ありません。

在俗生活に還ることは、俗臭になじむことでなく、出家の心を捨てるのではなく、まことの出家になられることであつたと思われるのであります。真実の出家とは、お念仏を偽りなく、どんな業報にあつても、その業報の現れた姿に一つになつて生きることであり、そこには力味や妥協や自己逃避があつてはならない。ありのままの姿を生きてこそ阿弥陀仏の御生命に丸々と恵まれ、大悲の光明にすつぽりと浴するのであり、阿弥陀仏の本願はそこに建立され或就されたのでありましょう。

聖人は一つも、微塵程も、虚飾のない御自身の内なる真実と、それに現実のありのままの生活の中に現れた業報のままを、すつぽりと「愚禿親鸞、非僧非俗」と仰言つたのであります。これを言葉を代えて言えば「聖人は出家も出家された」と言えるのではないかと思うのであります。

何という荘厳された聖人のお姿であろう。何という身一ぱいのお光の姿であろう。胸の中の自分だけに遊ぶのでなく、心身放下の露堂々、赤裸々の真実のお姿でありましよ

う。『しかればすでに僧に非ず、俗に非ず、この故に禿の字を以つて姓となす』如来の真実一つに生きること以外にこの身の生き方はない、たとえ命を奪われるとも如来の御慈光の外に何のこの身があろう、何の生き方があろう、この御真実のままに御流罪の生活におもむかれた聖人が、非僧非俗愚禿親鸞となられたのであります。これが実は出家を出家されたことになるのであります。

私等はここで聖人の荘厳極まりない丸々と阿弥陀仏の御慈光を浴びられたお姿を、も一つの角度から拝することができると思います。

聖人が阿弥陀仏と髪の毛一条のへだてもなく、如来の御真実と一つになつてのお姿が承元の法難によつて出家の出家、非僧非俗の御生涯になつたのであり、これは聖人の業報のままに法爾自然の御生活となつて、所謂、現在吾々の「在家の仏教」の起点となつたのでありますが、この出家を出家のお姿は、そのまま我々迷妄を迷妄と知らず愚悪を愚悪と知らない者への慈悲方便不思議の如来大悲の実践であつたのであります。出家とは自利であつてそこには利他がない、出家を出家されたところに自利から利他への行がある。非僧非俗の御実践がなかつたら、吾等どうしてこの大法に遭うことができましよう。聖人が出家を出家して下さらなかつたら、身をもつて愚禿の生涯を実現して下さらなかつたら、どうして身も心も十分に伸びのびとすることができましよう。

われらは聖人を阿弥陀如来の権化の御身と拝する。非僧非俗のお姿になつて下された聖人こそ如来聖人であります。如来の慈光を仰ぎ参らせた九十年の御生涯そのままが権化のお姿であり阿弥陀如来の御化身であられました。

自力聖道の門であつたならば、「光りを和らげて塵に同ず」であり「和泥合水」であり「垂手方便」であつて、高きより低きに下りるのであるが、聖人には、そのような方便善巧の門はもたなかつた。また自利とか利他とか入塵垂手の道を歩む必要はなかつた。身を以て山を登り谷を渡りつつ念仏されるままが自利即利他であられた、自利の外に利他があるのでなく、自利の愚禿、非僧非俗が、即ち絶対の大悲利他行になつておられる。不可思議の御計らいが如来行として我等と一つになつて救つて下さる念仏であります。

も一つ、非僧非俗の御姿を拝すると、信心の側からであります。

聖人は俗を出でて遂には念仏に帰せられたのであるが、その念仏の真実は聖人を業報のままに再び俗に還らしめた、すべての虚飾をかなぐりすてて俗にかえられた、肉食妻帯された、田夫野人の仲間に伍せられた。百八十度の転

回が心の出離、身の出家であるが、これをも一度百八十度転回の愚禿親鸞に還られたと拝する。形は元のままにかえられたが、内なるものは如来の真実が一段の光を増したお姿となられた。これが「僧に非ず」「俗に非ず」のお姿である。信心というもの、念仏というもの、そこには何かが雑つてくる、信心得たり顔という夾雑物が入りがちである。有難い人になりたい心も起る、なつてはならぬと戒めているままにいつしか人師になつている自分に驚く。ゆるやかな坂を登つていると登つている自覚がないが、暫く歩いていると、いつの間にか高い所に居る自分に気付くことがある。これらの出家的悪習がすつかりとれ、信心もなくなつた信心、念仏も消えた念仏、『ただ念仏して』の仰せのままのお念仏一つになられた非僧非俗の聖人のお姿が輝く。禅では「悟り」が除れたという。「味噌の味噌臭きは上味噌に非ず」という。ほんとに元の木阿弥で、しかも、そうでない。元のままに還つて、しかも、俗に非ずである。聖人の風光は、信心の生活自体がおのずとしからしめて自他的に、一切衆生的に生きられたところが一流のところであります。相対五分々々を出て出家の絶対に入られたが絶対であるからして絶対をも脱して相対五分々々の中に消えてしまわれたお姿の尊さがある。禅の道元禅師の語を借りれば、心身脱落したが、それをも脱落して「脱落心身」である。「心身脱落、脱落心身」と連句に吐かれる妙味を聖人は生活に実現して下さつたのである。法爾自然のおもむくところ、そのままが実は人間の真実の生活の相となり其れはまた不可思議の善巧となり我等に大利を与え賜うたのであります。禅ではたとえば無字の公案を師家から貰つてこの「無」に参究参禅し、大いに疑団を起こしてこれを拈提し遂に無字の一関に参到する、無字が悟れたのである、これが見性であるが、これから千七百則の公案を、三年、五年、十年と参究透過してあらゆる面から見性の骨を作り髄を造るが、長い間かかつて修行を重ねた揚句、どうなつたかと云えば、無字に還つてくるのだと云う。無字に参じて三十年後に無字に還る。これが悟りが無くなつた悟りであり、これで「大事了畢」という。禅の三百六十度の転廻がここに出ております。しかし禅は出家を出家し大事了畢した姿であるが、真の出家の出家、非僧非俗とは、事実の上でやはり一方は僧であることに間違いないのに対して、他方は僧俗を超えた真の人間の真姿が顕れており、それが特定の人間を対象とせず、一切衆生を対象としてその中に在ります。禅はここから和光同塵しなければならず、入塵垂手の方便門に入らなければならないが、真は俗に入るのでなくて俗に在るのが最初からの建前であつて、それが出家を出家した姿、非僧非俗となつているの

であります。

真宗が高くて禅宗が低いというのではなく、何れもその顕れ方にはそのままで仏の真意が顕れておるのであつて「南山に鼓を打てば、北山に舞う」のであり、真宗は「千江水あり千江の月」とすれば、禅宗は「万里雲無し万里の空」でもありましよう。

禅と念仏

室住熊三

肉食妻帯の宗教とか、凡夫の宗教とか、われらは非僧非俗の教えに生きるとかいうが、聖人の非僧非俗の宣言はそんな安易な道でない、念仏者の生活をこの聖人の一句の告名から味わせて頂いた一端をのべました。諸賢の御叱正をお願い致します。

（三九、七、二六）

「心頭を滅却すれば火もまた涼し」と云う事がある。此の頃のうだるような暑さにはこういう心境が欲しい。

お釈迦様の教えには、聖道門と浄土門との二つがある。聖道門とは自分の力で、煩悩を滅却して悟りの世界に入る事である。此の道を行く人は、「釈迦何人ぞ、我何人ぞ」という意気込みで、お釈迦様を自分と同格にして悟りの道へと進む。浄土門の人は自分の力の貧しき事を信知させられてひたすら、如来の救済に依在して念仏の道をたどる人である。道元は前者で、法然、親鸞は後者である。

念仏の道は阿弥陀仏の道である、この流れの中に法蔵菩薩も現われ釈尊も竜樹も天親も出現されたのである。親鸞聖人のたたえられた七高僧は皆この流れを汲んだ方々である。

甲斐和里子さんの歌に

ともしびを高くかかげてわが前を
行く人のあり　小夜中のみち

というのがある。私の大すきな歌で、いつも口ずさんでおる。浄土門はこういう道である。自分の前に多くの人々が真理の光を高くかかげて進んで呉れる、その人に導かれて、私は人生を間違いなく進むことが出来る。有難いこと

である。私は先日歎異鈔研究会で第二条をお話して清沢先生の「他力の救済」を紹介した。

私は明治四十三年に近角常観先生の点じられた第一の光に浴した。爾来今日まで幾多の慈光に照らされて来た身の幸をよろこばしてもらう。

第二条には色々尊い教えがある。第一段は求道には不惜身命という事が示されて居る。他力の教えの中にも道を求める人は生命がけである事がわかる。生命がけで教を聴く。その教は何を求めるものか。往生極楽の道を求める。金持ちになるのでも、高位高官になるのでも、健康になる道でもない。往生極楽の道である。歎異鈔全文は此の往生極楽の道を明らかにするものである。此れをはきちがえてはならぬ。

第二段には、その道は学問や研究によるものでなく、ただ念仏に依るもの、これをよき人に聞かされて信ずる一つである。行信の世界である、南無阿弥陀仏なる所行を信ずる一つである。

第三段に、いずれの行も及びがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかし、と我身は如何なるものであるかを知る機の深信が示されてある。歎異鈔の眼目は二種深信と現生不退にあると曽我師は述べて居られる。二種深信というのは、法の深信と機の深信とである。仏様が間違いなく私を救つて下さる事を信ずるのが法の深信であり、自身は罪悪深重にして、して見ようもないと感ずる事が機の深信である。善導大師の申された

機については「自身は現にこれ罪業生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流転して出離の縁あることなしと深く信じる」

法に即しては「かの阿弥陀仏の四十八願は、衆生を摂受して疑なく慮なく、かの願力に乗じて定めて往生を得と深く信ずる」であります。

此の二つの事柄は全く別々の事柄ではなく全く一つである。法の深信から機の深信を開き、機の中に法を摂める。この生活が真宗信者の信生活である。

第四段に、伝統の尊さ、生命の流れが述べられてある。自分ひとりの独断の世界でなく、多く先覚者の流れを汲むよろこびが語られる。

私はこの第四段を此の時特に強く感じた。旧求道会館に一高在学中毎週近角先生をお尋ねして、四五名の徳風会々員と先生の歎異鈔の講議を拝聴したとき、部屋の壁にかかつて居たのが清沢先生のお写真であつた。初めの頃は誰の写真かなと思つた位で、清沢先生のお写真であることも知らずに居た。私が真宗のお話をきく御縁が出来たのは此の時で、明治四十三年九月の事で、清沢先生は明治三十六年

六月六日四十一歳で往生を遂げられたので直接お目にかかる機会はなかつた。しかし、清沢先生の面影は今に私には忘れる事が出来ない。私は此の先生の心境を高くかかげられた灯火の一つとして皆の人々に伝えたいと思い「他力の救済」と「我信念」とを朗読した。

昭和十九年九月五日に肺患のために亡くなつた唯一人の私の男の子にも此の先生の尊い信念を伝えた。その信力に依り、此の子はお念仏を唱えながら母親なる私の家内に、「おかあさんはあとから来なさい」と云つて彼の世へと旅立つた。誠に私には因縁深い、尊い御文章である。先生の「他力の救済」の中で、

「我他力の救済を念ずるとき我が世に処するの道開く」と云われる、又「物欲のために迷わさるる事少く」「我が処する処に光明照らし」とも云われた。

「嗚呼他力の救済の念は能く我をして迷倒苦悶の娑婆を脱して悟達安楽の浄土に入らしむるが如し。我は実に此の念によりて現に救済されつつあるを感ず」

先生は現に救済されて居たのである。また「我信念」に如来を信ずる理由三ケ条を挙げて、信念を吐露して居られる、その中にて特に胸うたれるお言葉をあげると

第一には如来を信ずる事によつて煩悶苦悩が払い去られる。

第二には人間の智恵の窮極である。何が善だやら何が悪だやらわからなくなり、一切の事をあげて如来を信頼する。

第三には其の無能の私をして私たらしむる能力の根本本体である。

「私は此の如来を信ぜずしては生きても居られず死んでも往く事も出来ぬ」と云う強い信念を語つて居られる。此の第一条は信じた心の有様を語られたもので、此れを今すこし詳説すると、

「私が信ずるとはどんな事か。なぜそんな事をするのであるか。それにはどんな効能があるかと云う様な色々な点があります。先ずその効能を第一に申せば、此の信ずるという事には私の煩悶苦悩が払い去らるる効能がある。或は之を救済的効能と申しましようか。兎に角私が種々の刺戟やら事情やらのために煩悶苦悩する場合に此の信念が心に現われて来る時は、私は忽ちにして安楽と平穏とを得る様になる。其の模様はどうかと言えば、私の信念が現われ来る時は其信念が心一ぱいになつて他の妄想妄念の立場を失わしむる事である。如何なる刺戟や事情が侵してきても信念が現在して居る時には其の刺戟や事情がちつとも煩悶苦悩を惹起する事を得ないのである。私の如き感じ易きもの、特に病気にて感情が過敏になつて居

るものは此の信念と云うものがなかつたのならば非常なる煩悶苦悩を免かれぬ事と思われる。健康な人にても苦悩の多き人には是非この信念が必要であると思う。私が宗教的にありがたいと申すことがあるが、其は信念のために此の如く現実に煩悶苦悩が払い去られるよろこびを申すのである」

と述べて居られる。これは全く、禅の妙諦と一致するものである。信念があらわれる時、心一ぱいになり、他の妄念、妄想が入る余地がない、心頭を滅却した状態と云われる。私は毎朝、座禅しながら、お念仏を唱えて居る。形は道元にならい、心は親鸞の伝統に従うというべきか。私の座禅は、共に近角先生の門に草履をぬいだ大峡秀栄氏から習つた。大峡氏は求道会を脱出して禅門に走り、宗活禅師に師事して両忘協会の師家となつたが縁あつて、大正七年私と共に明治専門の教官となり、浄心会にて仏事を共にした。此れに引かれて、学生と一所に座禅をしたのが習となつたものだろう。

就人立信ということがある。人について信心を頂く。私の信心は近角先生の御教に依るものである。

善導大師は釈尊の云う事を信じられた。此れは就人立信である。法然上人は善導大師をよき人として仰ぎ、その言葉を信ずる。御開山聖人はその法然上人をよき人としてそのよき人の仰せをこうむつてただ念仏して弥陀に助けられると信じて居る。

此の就人立信に対して善導大師は更に、就行立信と云う事を述べて居られる。先ず人を信じてそれを実行して行く実行して行くについては更に根本にさかのぼつて如来の選択本願の大きな歴史的事実を信ずる、此れが就行立信である。

近角常観先生は円満な仏様のような顔をされた立派な方であつた。先生の御人格を信ずる御友達で「先生は信用するが、先生の云われる事は中々信じられぬ」と云うような事を云う人に学舎で何回かお逢いしたが、今考えて見ると此れは真実の就人立信ではない。何故かと云えば、その根本となる就行立信がなかつたからではなかろうか。

私は大正五年に真空管の製作から真空妙有の妙味を自覚したが、参禅に依つて此の心境には中々入り難い。清沢先生の「我信念」に依りて就行立信の妙諦を味得することが出来た。

暑夏の一日、歎異鈔研究会の集りを顧みて一文を記し涼味を満喫しつつ慈光誌に信心の涼風をお送りして、誌友諸兄の御健昌を祈念す。

昭和三十九年八月十日

人は善人になりたがるものです

柳瀬留治

愛情というものは人間のもつ本能で、畢竟自己愛であろう。生れ初めは親や人を頼つて愛を求め、愛を呼吸して育ち、親兄弟から友達、やがて男性に延び、妻子という風になる。

いよ〳〵広がつて余りに人間関係が煩わしくなると孤独を愛するようになり、人間は本来孤独だと覚り、そして孤独に徹しようとするのです。だが人間には群居本能がありひとりぼつちになると淋しくなり、人が恋しくなる。西行も芭蕉も孤独を愛し、閑を求め、白雲に身をまかせ、旅を生涯としたが、余りに長く人里に遠ざかると、人里を慕い人を恋しむという風で、いわば孤独がやりきれなくなつたようです。

孤独を愛するのも、又人を恋うのも、己を愛しむ自己愛の各一面でないでしようか。

又人を愛しむということにも人間として限度のあるもので愛すると関りの煩わしさが生じてくるものです。そして真に愛するといつても限度があつて、わが身を削つてまで人をいつくしみ施すということは出来ないのです。昔、布施忍辱を行ずる修行者もあつた由ですが、今日の社会では人間としてあり得ないことに思われる。

世に道徳家といわれる人があり、強いて人に徳を施そうとする。だがそれは心の伴わぬ、不自然なものになり、偽善になるのが常です。第一にそしたおこないが、人間味の欠けた乾燥無味となり、義理式のものにならざるを得ない。徳川時代の義理人情、延いては下町風のお付合いにも、それが多分に含まれており、却つて人間関係の煩わしさが生じ淡々と生きて行けなくなる。親の子に対しての愛は別として、多くの愛、慈しみは相対的なもので、慈しみの底には無意識ながら何等かの対価、お返しが予想されている。喜んでくれ、感謝してくれよう、向うも愛してくれようといつた心的なもの、更に物質的な返報などが内在したものです。『歎異鈔』にも「思うがごとく助け遂ぐること極めてあり難し」といわれたことです。

現今の中上流の社交婦人達が、美わしい服装をつけ、溢れる表情で、さわやかな言葉のやりとり、いかにも豊かに溢れる愛情をもつかの如く感じさせ人の心を魅了する。だ

がさてそんなに人の心を容れ、人に対して慈しみをもつているのであろうか。

『論語』にも「巧言令色、すくなし仁」といわれてある。真に人をいつくしみ愛するのでなく、愛嬌や美言の紅粉を装つて、己を化粧し美しく見せ、人にそら喜びをさせ、自分もそれでよい気になつているのであるまいか。己をいつわり人をたぶらかす、いわば人生をだまし合つて渡るのであるまいか。かつて江戸時代の狂歌に

世の中はきつねたぬきの化けくらべ
穴より出でて　穴に入るなり

といつたのがあり、そした世渡りを諷していることです。世間に正直な人があつて、そした美言を真に受け、頼みにし当てにする。ことに「溺れてはわらを摑む」といつた風に窮した場合、それを当てにし、それに迷わされ、酷い目を見るのです。真情もないのに美しい言葉、愛嬌を以つて人を喜ばせることは嘘偽であり、言葉の空手形、それを使つて豊かに見せかける詐欺ともいうべきです。

心が貧しく真に人を慈しみ恵むことが出来ないならば始めから己の貧しいことを打出して人に当にさせず、頼みにさせぬ方が、人を迷わさず、又相手に人生の真相を悟らせ、意を決せしもしようと思うのです。

人はどうも善人になりたがり、やさしく見られたがる。特に人道主義を称える人は、相手の心を迎えいれ、やさしく人情的にと心掛ける。それが実際上やり遂げられず、それが単なる気やすめになり、一時の慰めに終り、人を迷わすことになり勝ちです。

善人になりたがり、やさしく見られたがる、それは第一に己の心を省みない所の偽つた美言で、結果的には遣り遂げられぬため嘘つきになる。あちらにもよく、こちらにも善くといつた所から、つい二枚舌の使い分けになるのです。それが宗教信者、特に悪人成仏の念仏者にさえ見ることです。初めから悪人になれる人、言い難いことを正面切つて言い得る人は本物で、人を釣つて迷わすことがない。先日も念仏者で善人ぶる人に言つたことです。

『あなたば歎異鈔を何と読んでいますか。「善人なおもて往生をとぐ、いかにいわんや悪人をや」とあるではないですか。又「煩悩具足のわれらは、いずれの行にても生死を離るることあるべからざるを憐み給いて願を起したまう本意、悪人成仏のためなれば、他力を頼みたてまつる悪人もとも往生の正因なり。よて善人だに往生す、まして悪人はと仰せ候いき」を更に読み直して下さい』

と申したことです。

己が悪人である、とは、今現に悪い心の持主だとの自覚です。悪を振りかざし、堂々悪を行うことではないので

す。悪人を憐む念仏があることによつて、始めてわびる心で、私は全く悪人ですと頭を垂れた自覚です。

もつとも生きているという事は、安定を保つている様で体も心も同様、不安定を来たすと崩れる。己に欠陥ありとなると心に破綻を生じ、迷いを生じて崩れる。不安定は己の否定となり、生の否定となる。何とかしてこのいびつな不安定にある苦しさを取り直し、立ち直ろうとし、自己を正しいものに弁護し、理由付けしようとする。これは境遇上、又はあの場合止むを得なかつたのだと、己に理由をつけて綻びを縫いあわす。これは多くの犯罪者の自己弁護するを見ても判ることです。「泥棒にも三分の理がある」とはこのことです。

かくあぶな気な一角に中心を見出して立とうとし、安定を保とうとしている人が多いことです。たとえば、三角形の頂点で立とうとするそれです。重心さえ得れば立てぬ訳はないが甚だ危険です。今いう所の己は悪人であるとの自覚を以つて立つ、それは三角形の底辺をもつて立つもので本物の己の自覚で立つものであつて、倒れようはないのです。これはわが近角先生の常に仰せられたことです。

昔から長寿な方の訓言(おしえ)に「嘘つくな」の一条がある。嘘を一つ言うと、それを縫い合わすために第二第三の嘘をつかなければならない破目にとなる。あの人この人に言葉の使いわけをしなければならなくなる。二重人格、三重人格という風になつて自己分裂を起し、人格の統一、生命の統一を欠くことになり、己の内部に第一、第二等の使い分けのずじと、条の内部摩擦で心中無駄な消耗を来たして疲労し、且つ心の統一を乱すことです。長生きは心が澄み極まり、常に統一されてあるべきだ、というのです。

この「嘘つくな」を言いかえると「善人になりたがるな」ということになる。嘘つくのは良い子になりたい下心があるためです。「ため」というのが元来感心出来ない。「有為」であるからです。長寿ならんがため、心を澄ませ統一を保つための方便や手段でなく真実でありたいものです。

畢竟、私共の人を慈しみ愛すること自体、自分が愛しく可愛いことから発した本能です。己が主で隣人が従なのです。善人になりたがるが、なる資格を内存しないからなれない。なれない己だと判れば、三角形の底辺ですわる外はない。事実そうなんだから、これ必定のことです。

底辺ですわつて見れば実に安楽で、第一に倒れる心配がなく、それに人からよく見られたいという苦労もなく、ただ自身の能う限りをなすのみです。後は世から何と批判されても、己の能力だけの底辺を尽してのことで、お許しを願うのみです。

恰も今プロ野球、大相撲の季節です。然も東京オリンピックの年です。各選手は命がけです。競技に限らず、人生生活は食うか食われるかの戦いです。戦うことは人道上ほめられることではないが、生きぬく上に避けられぬ必至の業、否、勇を鼓して戦い、勝たねば生の存続の出来ない、これは人生です。

あの相手、この相手にも悪く思われぬ様にしていたらどうなることでしょう。悲しいことには、我々は悪を、断じて行わぬと生きて行けぬ、かく我々は悪を避け難いがために宗教があるんです。

我々は己を省み、己の心中に安定の対象を求めていては畢竟「これでよいのだ」との安定が得られない。己の体を己の力で持ち上げられぬと同様です。そこに悪人成仏の宗教が他から飛び込み来る所以です。これによつて己が悪人だとの自覚の底辺に立てるのです。人生生活の戦いも、競技もこの底辺に立つ心的安定により始めて全心身力をぶちつけて勝ち抜くことが出来るのです、迷わず戦えるのです。

「短歌草原、巻頭言より」

警策

昔、南嶽慧譲禅師は、馬祖道一禅師を伝法院に入主させた。馬祖はそこで連日坐禅、心に座禅をやつている。

或日のこと、南嶽が訪れて来て、

「一体どんなつもりで座禅しているか」

とたずねると、馬祖は、

「仏になりたいと工夫をして居ります」

と答えた。すると南嶽はだまつて、地面にころがつている瓦の破片をひろい、かたわらの小石をとつてそれを磨きだした。馬祖は不思議に思つて

「この瓦を磨いて何にされますか」

と聞いた。南嶽禅師は

「これを磨いて鏡にしたいのだ」

と答えると、益々不審に思つて

「それは無理であります。瓦を磨いて、どうして鏡とすることが出来ましようか」

と馬祖が再びたずねると、禅師はすかさず、

「座禅して、作仏を願うのもこの通りだ」

と教誨した。この一語が心底を打つて、馬祖は座禅がただ修養や修業のためでないと知らされて、玄意を悟つた。

生くべきか死すべきか

三瓶徳英

私は八十四になりました。昔の学友はほとんど死し、頭のよい将来有望の者は皆若くて死んでしまいました。寧弱怯劣で、無学文盲の私は今日まで生きて、何の役にも立たず、世間の御厄介になるばかりであります。このまま生きるべきか、又死すべきかと思うこともあります。

古い諺に「死は易く、生は難し」と聞きましたが、私はその反対に「死は難く、生は易し」と云うて見たい気がします。死ということは一人一人の一大事で、常識の上からは自殺などは出来ないはずであります。しかるに自殺する人は何時の時代でも相当あります。病気のため、金銭や怨恨、色情等のために死なねばならぬと苦悶の逃避をするのであります。乃木大将の死なれた時に、批判をしたと云うので谷本富博士は追放になりました、死んで行く人にとつては批判も攻撃も我関せず焉でありましよう。

お経には「死を求めて得ず、生を求めて得ず」と説かれ何としても業報を逃れる事は出来ぬと思います。

「穢土を厭離し、浄土を欣求せよ」と仏教でいわれますが、私は「穢土を厭離」のところまで達せられず「諸苦を厭離」で、したがつて「浄土を欣求」の心はいたつて影が薄いけれども、浄土ということを時々考えます。

経典などには、安楽国、極楽国土、涅槃界、大寂滅、無量光明土、等種々に説かれてあります。

十年ばかり前、福島先生の『浄土の荘厳』という本を頂き、拝読して、浄土の有無、往生、浄土の諸相など、委細御教示を蒙つて感銘感謝して居ります。

私は少年の時、石井利純叔父から色々の教訓や行状を教えさずけられて来ました。その叔父の五十年忌に来年は当りますが、今日までその恩恵を蒙つて居ります。

叔父は、毎日、朝夕、白衣黒衣黄袈裟で本堂の勤行をすまし、庫裏の御内仏前で、天親菩薩の『願生偈』を必ず大本を持つて緩読しました。私も始は本を持つて読みましたが、永い間に暗記し、本は不用になりましたが、叔父はいつまでも本を見ずには読みませんでした、そして非常な程緩読せられました。私は今でも夕方仏参の時は必ず『願生偈』を拝読します。

願生偈

天親菩薩の『願生偈』は、一句五字で、四句一行として、二十四行、総計九十六句であります。

これが天親菩薩の阿弥陀仏に対する信仰の告白と、仏の大慈悲より顕現する安楽国土の功徳荘厳を作詩せられ、一応解釈されてありますけれど、其意味が深いので、曇鸞大師が註解なされたのが『往生論註』上下二巻であります。

御和讃に、

天親菩薩のみことをも　鸞師ときのべ給わずば
他力広大威徳の　心行いかでかさとらまし。

と示され、又さらに

論主の一心と説けるをば　曇鸞大師のみことには
煩悩成就の我等が　他力の信とのべたまう。

との御教示であります。

さて『浄土論註』の始に、ただちに天親論主の論を説かれずに、竜樹大士の『易行品』のことを引かれて

「難行道と易行道をたとえて、難行道は陸路を徒歩で行くように、自力聖道の道はけわしく、浄土の教は、本願を信ずる因縁によつて彼の清浄土に往生出来るのは、水道を舟に乗つて行くように易行である」

とのべられ、その次に

「天親論主が如来大悲を信じ、経に依つて『願生偈』を作られた」

と述べられ、長々と『願生偈』について解釈せられています。

「始の一心帰命は、他力信仰の御告白。巳下安楽浄土の諸相の荘厳を経文によつて説き示され、最后の四句は廻向門。廻向とは己が功徳を衆生に施して下さるから、多くの人々と共に安楽国に往生せん」

との論主の仰せである事を説かれてあります。

又浄土の諸相を説かれて、弥陀法王の功徳、眷属往生人の功徳、安楽国土の功徳を説かれ、宮殿、諸楼閣、十方を観ずること無碍、等委細に解釈されてあります。

それにつきまして「極楽は楽しいから往こう」と云うような横着者は行けないと蓮如上人は云われました。

又、浄土の荘厳にあこがれる人は功利を望む我利我利亡者と言われますが、私は愚鈍我利我慢の性分で、これが頭をもたげる時、コンナ事を思うことがあります。

高台にある宮殿楼閣、観十方無碍とは何とスバラシイ眺めであろう、行つて見度いなあ、など、現今遊覧地のリフト登山の事など思い浮べるのであります。

又、或一部の人は、浄土の荘厳など実は無きことを有る

が如く立派に派手に書き立てて、私の様な無学文盲の者をだまして、念仏せしめる方便だという人もありましょう。

無量光明土に私が期待していた宮殿楼閣がもし無かつたならば、私のために急造し喜ばせ満足せしめて下さることもあり得ましょう。

現今の若い人達が都会にあこがれ、享楽に耽る様なことは異つて、往生即成仏で、往相還相の御廻向成就し、自利利他の大活動にとりかかりて享楽にふける時間は無いことでありましょう。

又諸上善人倶会一処の浄土には、恩師も父母妻子、兄弟親友同朋等に会い、忘恩不孝等の罪を謝し、永久不変の喜悦満足の覚悟を得させて頂くことは、ひとえに願力廻向の正覚の御名が私に潜入して下さつた強剛不可思議の御力に救われて行くばかりであります。

善からん者ばかりが念仏するのでなく、悪人が念仏する身にならねば個人も社会も全世界も救われないでしょう。

科学が進歩して便利はよくなつたが、一方では原子爆弾が出来て、戦々競々の世界となり、政治も経済も教育も宗教も、虚偽、かけひきが多くて、油断のならぬ生活をせねばならぬ時節であります。

弥陀経和讃に、

五濁悪時悪世界　濁悪邪見の衆生には

弥陀の名号あたえてぞ　恒沙の諸仏すすめたる。

と。又曇鸞和讃に、

安楽仏国に生ずるは　畢竟成仏の道路にて
無上の方便なりければ　諸仏浄土をすすめけり。

とあります。

我々人間は畢竟死なねばならぬから、安楽国に生れ、畢竟成仏せしめ、迷苦をのがれしめたまう御はたらきを方便と云われ、正直を方といい、己れを外にするを便と云われ自身住持の楽を求めず、一切衆生の苦を抜かんがための御はたらきが諸仏の利他行で、浄土をすすめたまう所以であるとのことであります。

○

何事も御はからいにうちまかせ
業にひかれて明かし暮らしつ
天親も曇鸞様も自利利他で
安楽国を説き教えます

○

如来作願為我建　正定滅度二利恩
天親曇鸞導末代　仰信浄国安楽園

愚人徳英草々稿

信の旅行く人々

花田正夫

（註）身をもつて仏のまことをあかしつつ、私の先達となつて導きを頂いた人々のことを録して恩を謝するよすがといたします。

聚墨生

S夫人は富裕の家に生れられて、女子大を卒業、嫁して二人の子供も出来ましたが、御主人が所謂〃三代目〃で、家産を失い、家屋敷も売り払わねばならぬことになりました。

そうこうして居りますうちに、御主人は他の女性のもとに走り、不動産の残りはその女の人の名義に書き換えてしまつて、Sさんは子供二人と借財をかかえるという始末になりました。

実家では「もう主人には見込みがないから帰つて再出発しては……」とすすめられるのですが、Sさんとしては二人の子供を手放すことがどうしても出来ず、女の細腕ながら何としてでも二人の子を育てようと決心し、母子寮の寮長として、不幸な母子の人々と生活を共にして子供の成長を楽しんで居られました。

ところが、長女の方が十五才頃に急性結核で亡くなり、残るは小学生の男の子一人となり、淋しい生活が続いて居りました。

その頃になつて、突然御主人から「子供は父親のものだから、自分が引き取つて育てる……」との申出がありました。然しSさんとしては「私が今日まで生きて来たのもこの子故でありますから、子供は自分に育てさせて下さい」と懇願しましたが「法にかけても取りかえす……」ときつい要求をうけるに及びまして、Sさんは途方にくれたのであります。

そうした事情がもととなつて、心のやすらぎを失つて、仏法を聞く身になられました。そして『歎異鈔』などもむさぼり読んでいられましたが、或日のこと、

「つくべき縁あればつき、離るべき縁あれば離るることあるを云々」

のところを述べられて、

「目に入れても痛くないほどに可愛い子も縁がつきれば離れねばなりませず、またどんなに離れようと思つても

縁があれば別れられないことを教えられました。それにつけましても、離合因縁であるといえる広いゆたかな世界は、仏様のおまことにまもられる身にして初めて知られることと思います云々」

との述懐でありました。それからは、念仏も口に浮かぶようになり、仏心にささえられるいとぐちを得られるようになられました。

そうなりますと不思議なことに、御主人の要求もゆるみ「困つた時には渡してくれるように」という風に好転したのであります。これは私が愚考いたしますのには、初めの頃は子供たけにしがみついて、いのちを捨てても放しはせぬ、となつていたのが、人生万事思うようになるとは限らぬということが知らされ、そこに仏のまことの光のましますことを知らされて、真にたのむべきは仏心のまことと気付き、心のゆとりが出来てから主人のことを考えて見ると、今まではすること為すことが皆疑心暗鬼で、子を取りあげよう〳〵としているとばかりに映つていたのが、そうばかりではなかつたと、和らいだ心で、話し合いも出来たのでありましよう。

このようにして、ささやかながら平和で、静かな生活を数年続けていられましたが、丁度春の彼岸の日でありました。

突然御主人から私に電話がありました。

「突然でありますが、家内が重態におちまして、一度お遭い申したいと云つて居ります……」

とのこと。早速日赤療養所にお見舞して、医師の方に病状を聞きますと、歳末の募金運動に出られたのがもとで急に肺疾が進行し、今では両肺ともに絶望で、酸素吸入で苦しさをたすけて居りますものの、あとは時間の問題で残念なことです、とのこと。

鳴々これが今生最后のお面会かと心に決して病室に入りますと、小学校五年のお子さんと、御主人とが看病していられました。吸入をかけて、苦しい呼吸をしておられるSさんに近づき、最初に申し上げましたのは、

「お苦しいでしよう。何か御用事と承りましたが、お子様のことでしようか」

とお尋ねすると、顔を横にふつて、

「いえ、今となりましては、主人のおりますことが何よりです。子供のことではなく私自身のことなのです。……私は人様の前ではいかにもおとなしく振舞つて来ましたが、この年月、心で恨みのろい、憎んで来ました。人面

夜叉です。……このような悪人でも本当におたすけ下さるのでしようか。ただこれ一つが……」

とのことでありました。

「Sさん、よくきいて下さい。人間同志は、どんな堅い約束をしても、マツタが入ることがありますが、仏様の仰せには金輪際マツタがありません、罪業深重、煩悩熾盛の衆生をたすけんがための願にてましますと聖人は保証して下さるのです……」

と、そこまで言葉を読けますと、Sさんの両眼に一杯の涙があふれ、お口から、ナム、ナム、ナムの念仏が湧いてもはや言葉は無用となりました。

しばらくして、両眼をひらかれたSさんは、ただ

「有難う御座いました、有難うございました」

の連続でありました。然し、重態の身体、しばらく話も中止して二十分も経ちまして再び枕頭で

「何かほかにおたずねは……」

と申しますと

「もう何もありません。御存じのように私の生涯はまことに惨めなものでしたが、今お念仏の上からは、私程幸せ者はありませんでした。……今生ではこれでお別れ致しますがお浄土から御礼を申上げます……」

と、念仏の中からほほえみをさえ浮べたお姿を拝しお別れいたしました。

その次の日、私は忙しくて時間が出ませぬままに、家妻がかわつて病床にお見舞い申しますと、苦しい息のなかからも静かに念仏申されつつ、御主人と御子様にみとられて安らかにお別れの挨拶をせられました由であります。その後日ならず念仏の息たえ終られました。

仏光照曜最第一　光炎王仏となづけたり
三塗の黒闇ひらくなり　大応供を帰命せよ
慈光はるかにかぶらしめ　ひかりのいたる処には
法喜をうとぞのべたまう　大安慰を帰命せよ
無明の闇を破するゆえ　智慧光仏となづけたり
一切諸仏三乗衆　ともに嘆誉したまえり
本願力にあいぬれば　むなしくすぐる人ぞなき
功徳の宝海みち〳〵て　煩悩の濁水へだてなし

あとがき

とで、これからも出来る限り注意させて頂きます、御海容たまわりますように。

△　榊原師の非僧非俗の信味は、禅門に身をおかれてのめずらしいお味い、否むしろ真宗ばかりにそだてられた者には耳なれ雀になり勝なことを新らしく教えられました。

△　室住先生は御晩年をいよ〳〵信嘗味読の御生活、ことに歎異鈔二条をお述べ下さいました。

△　柳瀬先生は、短歌草原誌の巻頭言に、何時も、信よりの歌心をおのべ下さるので、歌は音痴であります私にも、常に心光を仰いではその御原稿を頂いて居ります。

△　八十四歳になられました三瓶老師、淡々と信味をお述べ下さってのお生活、老いを忘れられてのお念仏の姿に接し、お引立てを蒙ることであります。

○

先日、昭四会という私共同期の同窓会の案内を貰いました。そのはじめに「青年老い易く、学成り難し」の一句があって、ハツと心うつものがありました。六十になって初めてしみじみとこの一句をそのままにうけとられるとは、まことに私を第一として、鈍物ぞろいでありますと再確認いたしました呵々。

御案内

○　一道会
毎週第一、二、三日曜
午后一時半、一道庵にて
市電、新郊通一丁目下車

○　教西寺法話会
毎月廿四日午前午后
昭和区小桜町、
市電、御器通所り下車

×　×　×

御案内

池山先生廿七回忌記念一道会

時　・十月廿五日（日）午前十一時
記念碑除幕
午后一時より一道会
法要と談合

所　・京都市右京区山田開町
浄住寺。　榊原徳草師住

道筋・京都駅より苔寺行バス
終点下車南へ四丁
新京阪、桂乗り換え
上桂下車、西へ六丁

註・御出席の方は浄住寺へお知らせ下さい。

△　近角先生の「大信海釈」は絶対信の境界を存分にお教え頂けますことで、まことに有難いことであります。それにつけましても誤字、誤植に不十分な点がありまして、先生にも、皆様にも申しわけないこ

慈光　第十六巻　第九号　昭和三十九年九月十五日　発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可

定価　一部　二十五円（送共）
半年　百五十円（送共）
一年　三百円（送共）
名古屋市南区駅上町二ノ八八
編集・発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　本田政雄
名古屋市南区駅上町二ノ八八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番